

六朝言語思想史研究

筑波大学人文社会科学研究所
哲学・思想専攻
和久 希 (WAKU, Nozomi)

本論文は、中国六朝時代の思想史の一側面を照射しようとするものであり、『六朝言語思想史研究』と題する。本論文の目次および各章の概要は、以下の通りである。

◆目次

序論

- 第一節 六朝時代
- 第二節 思想史像
- 第三節 理と文——六朝時代の学問思潮

第一章 大道の中 ——徐幹の経学——

序

- 第一節 学——六籍への通暁
- 第二節 章句から大義へ
- 第三節 大道の中
- 第四節 明哲窮理

結

第二章 経国の大業 ——曹丕文章経国論考——

序

- 第一節 文章経国論
- 第二節 立言不朽説
- 第三節 寿——徐幹の不朽説
- 第四節 一家の言Ⅰ——曹丕と徐幹
- 第五節 一家の言Ⅱ——皇覧

結

第三章 王弼形而上学再考

序

- 第一節 道のアポリア
- 第二節 王弼形而上学解釈の諸相

第三節 無と道——言語思想の観点から
結

第四章 言尽意・言不尽意論考

序

第一節 辞書的定義

第二節 言未だ必ずしも尽くさず——何晏

第三節 言尽意論——歐陽建

第四節 言・象・意——王弼

結

第五章 阮籍の三玄論 ——言外の恍惚の前に——

序

第一節 道——通老論

第二節 自然——達莊論

第三節 大人——通易論

結

第六章 言語と沈黙を超えて ——王坦之の廢莊論考——

序

第一節 中原の傾覆——東晋期の放達批判

第二節 王坦之の思想的立場

第三節 王弼・郭象から王坦之へ

第四節 維摩詰の沈黙

結

第七章 形而上への突破 ——孫綽小考——

序

第一節 玄を体し遠を識る

第二節 玄学から三教へ

第三節 形而上への突破

結

第八章 逍遙の彼方へ ——支遁形而上学考——

序

第一節 玄の又た玄

第二節 至人の逍遙

第三節 二重の忘却——逍遙の彼方へ

結

第九章 辞人の位置 ——沈約『宋書』謝靈運伝論考——

序

第一節 文の歴史的展開——『詩経』から建安まで

第二節 辞人の位置

第三節 音律的整合性と儒教的正統性

結

第十章 経典の枝條 ——『文心雕龍』の立文思想——

序

第一節 経典の枝條

第二節 三極の彛訓

第三節 文の枢紐

第四節 立文の道

結

第十一章 隠 ——『文心雕龍』の言語思想——

序

第一節 言語の外側、言語を超えるもの

第二節 言外の秩序

第三節 互体——もうひとつの体系

第四節 文外への遡及

結

参考文献一覧

◆概要

辛亥革命以前の中国において、儒教がおよそ二千年にわたり国家思想（正統思想）の地位にあったことは広く知られている。その一方、秦漢および隋唐という二つの大帝国時代に挟まれた六朝（魏晉南北朝）時代は、長期にわたり国家的揺動が続いた動乱期であり、思想史について見れば、つとに清・皮錫瑞『経学歴史』が「経学中衰時代」（魏晉期）「経学分立時代」（南北朝期）と規定して以来、国家思想である儒教が衰退し、民間信仰としての道教や外来思想である仏教が台頭した、いわゆる「三教交渉」の時代であると目されてきた。また当時は、玄学や文学、歴史学など、さまざまな文化的営為が繁栄した諸文化の交錯する時期でもあった。ゆえに思想・文化をめぐる従来の研究は、いずれも六朝時代には前時代の儒教一尊の気風を脱したとみており、そのうえで各々固有の学問的立場と関心とにより、諸思想・諸文化の一側面を討究することが主流であった。かかる研究史にあっては、思想史研究における儒教の比重の相対的低下を招くという一面もまた、不可避なこととして進行した。ところが現実には、各王朝の交替は儒教儀礼としての禪譲によって

おこなわれ、国家機構たる官僚制度も儒教のものが継続され、皇帝は天の祭祀を繰り返して自身の地位を視覚的に顕示していた。当時の国家の基幹を決定していたレジティマシー（正統性）は、やはり儒教にあったのである。では「経学」の衰退期にあって、それでも知識層の根底をなす六朝時代の儒教思想の質的様相とはどのようなものだろうか。本論文は、六朝時代には儒教が退潮傾向に陥ったために他思想が前景化したのではなく、むしろ六朝時代の儒教が道仏、あるいは老荘や文学などの文化的諸価値を積極的に含み込みながら、それらの複合体として展開した、という思想史的仮説に立脚する。そもそも儒教は「天」を中心に据えるものであり、漢代には「天」の法則的秩序すなわち「天理」解明のための数理科学的営為がさまざまになされていた。その後、六朝時代になると「天理」に相即する「人文」とくに「人」における合理的秩序（文）としての「言語」への関心が興隆したが、それらは単に儒教経学（経典解釈学）内部にとどまるものではなかった。本論文は、当時の言語思想を幅広く探究することにより、六朝時代の諸思想・諸文化の根底に潜在する儒教的エトスの文献実証的解明を目指すものである。

「序論」ではまず、本論文の考察対象である六朝時代の歴史・文化・思想的概況を略説し、あわせて当該領域をめぐる研究史に言及した。そして上述した本論文の立場、思想史的仮説を提示し、そのうえでかかる見通しに沿いつつ、六朝時代の思想史的展開について、とくに「理」と「文」に着目しながら、魏晋玄学、文章経国論、格義仏教、山水詩および斉梁期の皇室権力と文学等に関する概述をおこない、本論各章に対する序説とした。

「第一章 大道の中——徐幹の経学」では、建安七子の一人、徐幹の著作『中論』を取り上げた。徐幹『中論』の思想は、単に伝統的な儒家思想を述べたものであるとされ、ときとして独創性を欠いたものであるともみられてきた。しかし徐幹『中論』は伝統的儒家思想に立脚しつつも、後漢末の混乱をもたらした同時代の「俗士」に対して、「君子」の明晰な判断（辯）こそが「大道の中」すなわち儒教の古典的正統性や規範・教化の淵源に到達し得るとしていた。そして徐幹はかかる儒教の理想を「六籍」とりわけ『周易』の「窮理」に依拠しながら、形而上的境位に求めていた。本論文では、儒教の古典的正統性や規範・教化の淵源である「大道の中」の語に着目し、徐幹の儒教経学が魏晋玄学の嚆矢と呼ぶべきものであり、魏晋期の学問的方向性を決定づけるメルクマールであることを論じた。

「第二章 経国の大業——曹丕文章経国論考」では、三国魏文帝・曹丕による文章経国論について、彼が「一家の言を成す」と称揚した徐幹『中論』の議論を参照しつつ、その内実を探究した。またあわせて、曹丕による文章の制作が彼自身による「一家の言」を構想するものであったことについて論及した。曹丕による文章経国論は、近代的文学精神が古典古代に存在したことを示すものではない。しかしまた、特定の思想的著述（子書）のみに限定すべきものでもない。彼の文章経国論は、儒教経典を根底に、詩賦を含むあらゆるすぐれた「文章」を包含しながら世界像の全体を提示しようとするものであり、そしてそれは皇帝自身による『典論』『皇覽』制作の理論的根拠となるものであった。

「第三章 王弼形而上学再考」では、魏晋玄学の旗手である三国魏・王弼の形而上学的

思索をめぐって、「道」と「無」を同一視する主流的見解に対し、近年のヨーロッパにおける解釈をふまえつつ再考した。そしてとくに概念的把握（称）という観点から「道」と「無」について検討した。「名」「称」といった概念的把握は、対象を分断して、限定的に把握するものである。そこで王弼は「称中の大」（概念的に固定できる最大のもの）である「道」に対して「無称」（概念的に固定されない）というレベルを設定した。この「無称」としての「無」は経験的世界を超絶し、言語的記述の彼方に、あるものではないと設定される、そのようなものであった。

「第四章 言尽意・言不尽意論考」では、魏晋玄学における言尽意・言不尽意論争について、何晏（言不尽意）、欧陽建（言尽意）の議論を検討した。また従来、言不尽意の立場とみられてきた王弼について再考した。何晏の言不尽意論は、道家系形而上学の伝統に依拠しながら「道」が言語や感性による認識を超えたとし、その「道」を体得する儒教の聖人についても言語的に記述できないところがあるとするものであった。一方で欧陽建は、認識を二段階のものであると論じた。すなわち対象は言語を介さずに直接「心」に得られ（第一段階）、それを後から言語によって弁別・分節する（第二段階）というのである。したがって言語は対象を追いかけるように一対一の対応関係を結ぶ。欧陽建はそのようにみて「言尽意論」を著したのである。また、王弼は「言」と「意」の関係を論じる際に、「象」を挿入し、「言一象一意」の関係とする。これは語ること（言語）と示すこと（卦象）という二重の方法により「意」を尽くす可能性を模索するものであり、王弼はそこに言語を超える知の可能性を見出したのである。しかしそのこと——論理の超出については、それについて語る自身の論理をも敢えて忘却し、棄却することによって、はじめて純然たる「意」そのものを定立することができる、そのようなものとなるほかはなかったのであった。

「第五章 阮籍の三玄論——言外の恍惚の前に」では、竹林七賢の一人、阮籍による老荘易三玄の解釈を検討した。阮籍は『老子』『荘子』『周易』の三玄すべてについて「論」を著すことで形而上的至高の理知的把握を試みていた。阮籍は形而上的概念「太極」「元」「道」を統一的に把握し、それらのさらなる根底に「自然」を措定するが、その「自然」とは万物に対する理念的基盤であって、言語的に分節できず、万物のさまざまな様態から遡及的に見出されるものである。しかし、かかる彼の思弁的構想は、実在的世界とその背後にある理念的基盤までにとどまるものであり、究極的至高の手前において途絶していた。ただし彼には内的な直接経験・純粹体験というものがあつたとされる。本論文では、阮籍の論理的追求の途絶に着目し、かかる途絶こそが、言語を超絶した彼の内的経験の純粹性・絶対性を保全するものであつたことを論じた。

「第六章 言語と沈黙を超えて——王坦之の廢荘論考」は、東晋・王坦之の「廢荘論」を考察の対象とする。東晋期には、三国魏や西晋の玄学に対する批判的言説が盛行した。そこには范甯のごとく、何晏・王弼は死罪にも相当すると主張する者もあつた。王坦之もかかる風潮の中で、当時の放達的气運の思想的元凶を『荘子』に求め、儒教唱導の立場から「廢荘論」を著した。ただしその内容は、批判の対象である『荘子』を含めた老荘易三玄に依

抛するものであり、また王弼、郭象など、魏晉玄学の影響が濃厚であった。一方で彼は、当時の仏教的思惟の影響下にもあった。王坦之は『莊子』、魏晉玄学にくわえて『維摩經』の「入不二法門」にもとづきつつ、言語／沈黙の相対的対立を超える地平を開示しようとしていたのであった。

「第七章 形而上への突破——孫綽小考」では、東晋・孫綽を取り上げた。彼は老子も儒教的聖人も「道」を体得する点では一致しているとみており、さらに「喻道論」において、外来思想である仏教の「仏」もまた同様であるという主張を展開する。すなわち孫綽は「道」の体得という点から儒仏道三教を融和的に把握していたのである。ただし孫綽は、そのことを単に理知的に把握するのみならず、彼自身もまた実際に形而上的境位への突破を志向していた。孫綽「遊天台山賦」に示された形而上への飛翔は、彼が魏晉玄学や仏教的思惟を踏襲しながらも、さらにあらゆる相対的対立の彼方へと飛翔しようとする企図を有していることを伝えるものであった。

「第八章 逍遙の彼方へ——支遁形而上学考」では、東晋の沙門・支遁の玄言詩、『莊子』逍遙遊解釈と般若思想解釈とを取り上げ、彼が般若思想を媒介として魏晉玄学の形而上学的思惟にさらなる展開をもたらしたことを論じた。支遁による形而上学的思索は、老莊に依拠しつつ、万物の基底的存在のさらなる深奥（重玄）を目指すものであったが、それは理知的な思索を徹底的に先鋭化させていったその先において、そのような論理的思弁には還元できないものとして開示される、そのようなものである。支遁は『莊子』逍遙遊における「至人」の逍遙に託しつつ、かかる形而上的境位の体認を企図していた。そして彼は、それを単に中国古典思想の伝統にとどまらず、外来思想である仏教的理念とも接合するものとみていた。彼の般若思想解釈は『莊子』的な論理の究極的基底を超出し、そのさらなる基底中の基底としての「所以」を志向していた。そしてそれは論理的思弁の極北において、終局的にはみずからの思弁的追跡の全体を忘却することで目指されるものであり、さらにはその忘却さえもが二重に設定される、絶対的凍結、究極的深奥なるものであった。

「第九章 辞人の位置——沈約『宋書』謝靈運伝論考」では、『宋書』謝靈運伝論における「辞人」の評価に着目し、沈約があらゆる「文章」を儒教の古典的正統性の内部に位置づけようとしていたことを論じた。そしてそのための理論的根拠として、彼が音律の数理的整合性を律曆思想（数理科学）に裏付けられてきた儒教的正統性に重ねていたことにも論じた。沈約は声調の構成に自覚的であり、四声を論じたことで知られているが、彼は音律的根拠をもって「辞人（言語的な華美のみを追求する者）」を「詩人（『詩経』以来の正統的言説をなす者）」とともに儒教的正統性の内部へと繰り入れようとし、それにより伝統的儒教の整合性・合理性に基礎づけられた「文」の世界を新たに開拓しようとしたのであった。

「第十章 経典の枝條——『文心雕龍』の立文思想」は、劉勰『文心雕龍』を考察の対象とする。『文心雕龍』序志篇によれば、劉勰による『文心雕龍』の著述は、当時、過剰

なまでの装飾主義に陥って本来の經典的価値から逸脱してしまった「文章」に対して、それを儒教の古典的正統性に回帰させようと企図するものであった。彼によれば「文章」は本来みな「經典の枝條」として經典注釈に準ずる機能を担うものであり、国家秩序の確立のための資源であった。実際に劉勰は、それぞれの文体がいずれも五經を淵源とすることを示して、文章がみな經典的価値の内部にあると述べている。そうであるならば、經典が文彩を有しているのと同様に、あらゆる文章にも正統的文彩が必要である。これについて劉勰は五行説に依拠しつつ「立文の道」を提示した。それは視覚（形文）、聴覚（声文）、そして感性面（情文）においても整合的秩序を志向するものであり、劉勰はこれにより經典的価値に相即した正統的文彩の確立を提言したのであった。

「第十一章 隱——『文心雕龍』の言語思想」もまた、劉勰『文心雕龍』を考察の対象とする。『文心雕龍』隱秀編の「隱」という概念は、従来、言外の余韻、余情あるいは含蓄として、修辞上の概念と理解されてきたが、それは単に感性的、感覺的に捉えられるというもののみではないように思われる。劉勰は「隱」を「文外の重旨」と規定したうえで、それは珠玉に匹敵する価値を有しており、それを捉えるにはそのための方法に習熟してなくてはならないとした。その方法として劉勰が導入したのが、『周易』における爻の操作方法のひとつである「互体」であった。劉勰はこれにより、言語の限界を超えるところをも、言語以外の理知的な構造において把握する可能性をみていたのであった。